

私立医科大学アーカイブズの現状と課題

— 愛知医科大学アーカイブズの事例を中心に —

福 武 亨

【要 旨】

本稿では、愛知医科大学の事例を中心に実務的な立場から私立医科大学の現状と課題を把握し、今後の私立医科大学における大学アーカイブズの展望を示すため、アンケート調査と取材を行い他大学との比較を通して考察を試みる。私立医科大学アーカイブズは、機関アーカイブズと収集アーカイブズの側面から課題がある。機関アーカイブズにおける課題は、アーカイブズが法人文書の廃棄、移管について関わっている大学が少ないことである。そこには大学アーカイブズ側と文書を流入させる側の課題がある。大学アーカイブズ側の課題は、大学アーカイブズが法人文書の評価選別を行う際の課題であり、大学内の特定の個人や集団に由来した偏りのある判断を避け、学内外に説得的であることが重要である。文書を流入させる側の課題は、各部署による大学アーカイブズへの移管がうまくいかず廃棄されるという課題であり、大学アーカイブズは、各部署に出向いて現物をみる、現況等を聞くといった各部署とのやりとりが重要である。次に、収集アーカイブズにおける課題は、所蔵点数が少ないことである。愛知医科大学アーカイブズの事例に加え、聖路加国際大学の事例では、学生への広報を取り上げ、金沢医科大学の事例では、所蔵点数の多さを裏付ける出版物、写真等の自動的収集について取り上げる。今後の展望として医科大学においてはカルテ等も大学アーカイブズの収集対象になりえることも触れる。

【目 次】

はじめに

1. 大学アーカイブズに関する先行研究
2. 私立医科大学アーカイブズの現状
 - (1) アンケート調査
 - (2) 他大学との比較と私立医科大学アーカイブズの現状
3. 機関アーカイブズの事例
 - (1) 愛知医科大学アーカイブズの概要
 - (2) 愛知医科大学アーカイブズにおける評価選別
 - (3) 評価選別における実務上の課題
4. 収集アーカイブズの事例
 - (1) 愛知医科大学アーカイブズの事例
 - (2) 聖路加国際大学の事例
 - (3) 金沢医科大学の事例

5. 考察

（１）機関アーカイブズにおける課題

（２）収集アーカイブズにおける課題

おわりにかえて：大学アーカイブズと医療アーカイブズ

はじめに

日本における医学部を有する大学は2018（平成30）年現在で国公立82校（防衛医科大学校を含む）があるが、私立大学で医学部を有する大学のうち、医学部、看護学部等の分野のみで構成される大学¹⁾（以下「私立医科大学」とする）における大学アーカイブズの現状は十分に明らかにされていない。

全国大学史資料協議会²⁾が編集を行った『日本の大学アーカイヴズ』で各大学アーカイブズの現状が俯瞰できるが、私立医科大学に関しては、東京女子医科大学のみしか取り上げられていない³⁾。また、藤本大士によって、医療アーカイブズという位置づけのもと、国内外の事例が挙げられ総論的な議論が提示されているが、実務的視点からの具体的な現状は、その論文の性格から焦点となっていない⁴⁾。

私立医科大学における実務的な大学アーカイブズの取り組みは、新沼久美によって聖路加国際大学におけるオーラル・ヒストリーの収集手法に関して検討がなされており、個別的な議論は提示されているが⁵⁾、国内において私立医科大学の大学アーカイブズの取り組みに関する報告は少ないといつてよいだろう。

さらに、全国大学史資料協議会に加盟している私立医科大学が愛知医科大学、東京女子医科大学、東邦大学の3校のみで、看護学部を有する聖路加国際大学を含めても4校しか参加しておらず⁶⁾、私立医科大学における大学アーカイブズの取り組みについても消極的な現状が伺える。

1) 本稿で私立医科大学とした大学は、愛知医科大学、岩手医科大学、大阪医科大学、金沢医科大学、川崎医科大学、関西医科大学、北里大学、杏林大学、国際医療福祉大学、埼玉医科大学、昭和大学、順天堂大学、聖マリアンナ医科大学、東京医科大学、東京慈恵会医科大学、東京女子医科大学、東邦大学、東北医科大学、獨協医科大学、日本医科大学、兵庫医科大学、藤田保健衛生大学（現藤田医科大学）（あいうえお順）の22校である。

2) 全国大学史資料協議会は、大学史の編纂や資料保存等について研究する諸大学の連絡協議会である。1988（昭和63）年に設立された関東地区大学史連絡協議会（1993（平成5）年に東日本大学史連絡協議会に改称）と1990（平成2）年に設立された西日本大学史担当者が、1996（平成8）年4月に全国大学史資料協議会（62大学、20個人）を設立し、東日本大学史連絡協議会は東日本部会、西日本大学史担当者は西日本部会となっている。

3) 全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、2005。

4) 藤本大士「日本における医療アーカイブズの構築にむけて」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』11号、2015、p73-93。

5) 新沼久美「大学アーカイブズにおけるオーラルヒストリー収集手法－聖路加看護大学の事例からの考察－」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』10号、2014、p121-138。

6) 全国大学史資料協議会東日本部会会員名簿（2018（平成30）年10月2日現在）、西日本部会会員名簿（2018（平成30）年10月10日現在）に基づく。

しかし1970年代に医学部が新設された各大学も創立から50年を直前に控え、次第に大学の歴史を再認識し、大学アーカイブズが見直されている。愛知医科大学や兵庫医科大学のようにアーカイブズと称する部署が設置されているのはその一例である。私立医科大学における大学アーカイブズの現状と課題を把握することは、私立医科大学における大学アーカイブズを見直し、今後の運用に活かしていくために意義のあることであろう。

そこで本稿では、愛知医科大学の事例を中心に実務的な立場から私立医科大学の現状と課題を把握し、今後の私立医科大学における大学アーカイブズの展望を示したい。筆者の所属する大学アーカイブズを中心に報告するものではあるが、他大学との比較を通して考察を試みたい。

1. 大学アーカイブズに関する先行研究

西山伸は大学アーカイブズの理念として「現在に至る大学の機関としての営みを表す記録を適切に管理することで、大学内外の研究・教育および大学の管理運営に寄与し、そのことを通じて社会に貢献すること」を挙げており、「アーカイブズの基本的要件としては、親組織の運営のための資料（のうち歴史的資料となったもの）を扱うこと」と述べている⁷⁾。

また、森本祥子は組織運営のための文書がアーカイブズの「核」とし、各機関の特徴的な資料を「+a」と位置付けている。「+a」は、資料の特性にあわせて、アーカイブズだけでなく博物館や図書館での保存も視野に入れることができるという⁸⁾。

菅真城は、大学アーカイブズについて「機関アーカイブズ」と「収集アーカイブズ」が両立された「トータルアーカイブズ」を強調しているが、特に「機関アーカイブズ」であることが他の図書館、博物館等の収集とは異なる点であり、中核として位置付けられるという。続けて「大学アーカイブズとは、大学という法人によって作成ないし受理された法人文書を、ゴミ拾いの如く『収集』するのではなく、システムティックに『自動的に流入する』ようにして受け入れるところ」と述べている。菅は森本のアーカイブズの「核」について触れているが、「管理運営」だけでなく「教育研究」も重要であるとの見解を示している。そのうえで、「収集アーカイブズ」が「+a」の資料をいかに集められるかが「大学アーカイブズが有する組織・予算・人員等に規定された上での『トータルアーカイブズ』としての『戦略』による」と述べている⁹⁾。

本稿は、以上の大学アーカイブズの研究を前提とし、私立医科大学が「機関アーカイブズ」と「収集アーカイブズ」をいかに備えていくか、ということを考えていく。

7) 西山伸「『大学アーカイブズ』の現状と今後」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、2005、p3-20。

8) 森本祥子「大学組織のアーカイブズ：理論と実践の提示への期待」全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』京都大学学術出版会、2005、p101-113。

9) 菅真城「大学アーカイブズの社会的使命」『大学アーカイブズの世界』大阪大学出版会、2013、p42-64。

2. 私立医科大学アーカイブズの現状

（1）アンケート調査

私立医科大学におけるアーカイブズの現状について、私立医科大学20校にアンケート調査を実施した¹⁰⁾。そのうち10校から回答があった。集計数は半数であるが、別途取材をした1校と愛知医科大学を含めて計12校について、表1から表7にまとめた。

表1をみると、私立医科大学の多くの大学アーカイブズは、所蔵点数1万点よりも少なく、小規模な運営であると推察できる。なお、所蔵点数が3万点を超え、調査では最も所蔵数の多かった大学は金沢医科大学である。

表1 所蔵点数

所蔵点数	校数
30000～39999	1
20000～29999	0
10000～19999	1
～9999	6
記載なし	4
総計	12

次に、表2をみると、アーカイブズ資料を取り扱う部署のうち、独立した部署を有するのは4校であり、全体の三分の一程度であるが、アーカイブズに図書館、博物館等が担当している部署が3校であるため、半数以上が司書や学芸員といった専門員が所属する部署が関わっているといえる。

表2 担当部署

担当部署	校数
独立した部署がある	4
独立した部署はなく、図書館、博物館等 関連部門が担当している	3
独立した部署はなく、総務部等事務部門が担当している	2
独立した部署はなく、複数の部門が担当している	2
収集していない	1
総計	12

さらに、表3の他部署の連携についてみると、図書館との連携が4校、同窓会との連携が1校、それらどちらも連携がある大学が1校であり、図書館との連携が多いことがわかる。

10) 私立医科大学22校のうち、愛知医科大学とアンケート前に別途取材をした1校を除いた、20校でアンケート調査を行った。

表3 他部署との連携

他部署との連携	校数
図書館との連携がある	4
同窓会との連携がある	1
図書館との連携および同窓会との連携がある	1
記載なし	6
総計	12

表4をみると、展示について、常設展示を行っている大学は8校であり、多くの大学が行っていることがわかる。

表4 展示

展示	校数
常設展示を行っている	8
記載なし	4
総計	12

その一方、表5の目録の公開について、すべて学外に公開している大学は2校、一部学外に公開している大学が2校であり、学内のみに公開をしている1校を含めて考えたとしても目録の学外公開は消極的であり、対応はさまざまといえる。

また表6の所蔵資料の公開について、原則、学外に公開している大学は、1校のみであり、一部のみの公開が4校、学内のみの公開である2校を含めて7校になり半数を超えるため、所蔵資料の公開は進んでいると言えるが、目録の学外公開と同様に対応はさまざまであると考えられる。

表5 目録の公開

目録の公開	校数
目録内容は、すべて学外に公開している	2
目録内容は、一部、学外に公開しており、 学内でも公開、非公開を区別している	2
目録内容は、学内のみで、公開、非公開を 区別している	1
目録内容は、すべて非公開	3
目録なし	2
記載なし	2
総計	12

表6 所蔵資料の公開

所蔵資料の公開	校数
所蔵資料は、原則、学外に公開している	1
所蔵資料は、一部、学外に公開しており、学内でも公開、非公開を区別している	4
所蔵資料は、学内のみで、公開、非公開を区別している	2
所蔵資料は、すべて非公開	2
記載なし	3
総計	12

最後に、表7をみると、法人文書をアーカイブズ等へ移管している大学は1校のみである。学内規程等が定められており、管轄部署で管理、保存している大学は4校あるが、非現用となった法人文書の管理については消極的であるといえる。

さらに表2の担当部署と関連付けて考えると、独立した部署を有していたとしても、法人文書の廃棄、移管については行われている大学は少なく、機関アーカイブズとしての大学アーカイブズは、あまり整備されていないと推察できる。

表7 法人文書の管理

法人文書の管理	校数
学内規程等（保存年数や移管フロー等）が定まっており、非（半）現用化した事務文書を文書室、アーカイブズ等へ移管して、管理、保存している	1
学内規程等（保存年数等）が定まっており、非（半）現用化した事務文書は管轄部署で管理、保存している	4
学内規程等は定まっていないが、責任者の判断等で、非（半）現用化した事務文書は管轄部署で管理、保存している	2
記載なし	5
総計	12

（2）他大学との比較と私立医科大学アーカイブズの現状

ここまで、アンケート調査から私立医科大学アーカイブズの現状をみてきた。出版年が2005（平成17）年と時期は古くなるが、西山による調査をもとに他大学と比較してみると「所蔵点数」、「展示」、「所蔵資料の公開」について、より現状が明確になる。調査結果は次の通りである。

所蔵点数について、所蔵点数を記載した36校（国立も含む）のうち、1万点未満の機関が10校、1万点から2万点未満の機関が8校である。2万点までで半数を占めている¹¹⁾。

展示について、私立大学で常設展示を行っている大学が17校で、西山は「展示は学術的営みであると同時に、大学にとってみれば歴史や建学の理念等を社会にアピールする絶好の場」と述べており、積極的に展示が行われている¹²⁾。

11) 西山前掲論文。資料保存機関の開設年について、1990年代が16校、2000年代が16校であり、出版年からみて開設から10年前後の大学が多いことが特徴である。

12) 西山前掲論文。

所蔵資料の公開について、私立大学で一般公開が14校、研究目的のみが15校、学内構成員のみ公開が12校、非公開が8校であり、西山は「公開への姿勢は限定的な条件を付している機関も含めてさまざま」と述べている¹³⁾。

以上のことから、所蔵点数、展示、所蔵資料の公開の3点について比較すると、私立医科大学アーカイブズの現状は、次のようになる。

所蔵点数は、8割以上が1万点未満のため、他の私立医科大学アーカイブズと比べて、全体的に少ない傾向にある。

展示は、半数以上が常設展示を行っており、他の私立大学と同様に多く行われている。

所蔵資料の公開は、目録公開も消極的で、原則公開している大学は少ないが、限定的な公開や学内のみの公開をしているといったように、他の私立大学と同様に公開の姿勢はさまざまである。

さて、これら3点に加えて、他の私立医科大学アーカイブズとの比較はできていないが、アンケート結果から、少なくとも「独立した部署や図書館等の専門性を有する部署を有していたり、連携していたりしていたとしても、アーカイブズが、法人文書の廃棄、移管について関わっている大学は少ない」ということも現状として挙げられるだろう。これは私立医科大学アーカイブズにおける機関アーカイブズの機能が不十分であることを示している。

以上のことから、展示、所蔵資料の公開については、他の私立医科大学におけるアーカイブズの現状と合致しており課題といえるが、本稿では、私立医科大学に焦点を絞るため、第3章で「法人文書の廃棄、移管については行われている大学が少ないこと」、第4章で「所蔵点数が少ないこと」について事例を紹介していく。

そこで、まずは法人文書を受け入れ、評価選別を行っている愛知医科大学アーカイブズの事例を紹介する。

3. 機関アーカイブズの事例

（1）愛知医科大学アーカイブズの概要

愛知医科大学は、1972(昭和47)年に開学した私立医科大学のひとつである。愛知医科大学アーカイブズは、創立三十周年を記念した『愛知医科大学三十年史』の編纂時に収集した大学史関係資料を整理保存し散逸を防ぐため、2008(平成20)年に設置された愛知医科大学大学文書室がもととなっている。公文書管理法の制定等を機に、アーカイブズの時代に応えるため、2010(平成22)年に大学文書室からアーカイブズと改称した。

2012(平成24)年には、総合学術情報センターの前身である医学情報センター(図書館)内に移動し、アーカイブズ室長はセンター長、副室長はセンター事務室事務長が兼務することとなり、アーカイブズ業務に司書が参画することとなった。その後、医学情報センター(図書館)が総合学術情報センターに改称したが、これまでと同様に総合学術情報センター長をアーカイブズ室長、副室長を事務室課長が兼務することとなった。

13) 西山前掲論文。

2018（平成30）年10月現在、アーカイブズ室長（兼務）、副室長（兼務）、教員（非常勤）、司書（兼務）、事務職員（専任）の5名体制で大学本館（1号館）5階にある一室を利用して運用している。主な業務の流れとしては、週1日程度勤務している教員のもとで、専任の事務職員が主に三十年史編纂時のコレクションを再整理しており、司書（筆者）が法人文書の評価選別、アーカイブズ資料の受入、整理を行っている。

管理・運営に関する委員会としてアーカイブズ運営委員会が設けられており、学長、医学部長、看護学部長、病院長、法人本部長、事務局長、アーカイブズ室長、その他医学部、看護学部から選出された教授の9名で構成され、大学アーカイブズの運営に関する事項等を審議する。

保存資料は、10370点（2018（平成30）年3月31日時点）あり、学内刊行物と他大学の資料が中心となっている。点数は少ないが、法人文書の移管も進めており、保存資料のうち、318点を保存している。

保存資料の目録には、シェアウェアを利用しており、さらに法人文書等を除いた資料の一部は図書館システムを用いて公開を行っているが、資料の利用については学内に所属している者に限定としている。

なお、関係規程は次の通りである¹⁴⁾。

- ・学校法人愛知医科大学文書規程
 - ・学校法人愛知医科大学文書保存規程
 - ・愛知医科大学アーカイブズ規程
- ・アーカイブズへの学内刊行物納入に関する要項
 - ・愛知医科大学アーカイブズ利用内規
 - ・文書の評価選別に係るマニュアル

（2）愛知医科大学アーカイブズにおける評価選別

愛知医科大学における法人文書は、学校法人愛知医科大学文書規程において、文書の作成、受付、発送、保管等について必要なことが定められており、さらに文書の保管について、2015（平成27）年に学校法人愛知医科大学文書保存規程（以下「文書保存規程」とする）で別途定めている。

文書保存規程第6条第1項では、保存期間が満了する文書について、「アーカイブズ室長による愛知医科大学アーカイブズ規程第1条に規定する資料としての選別を受けなければならない」としており、法人文書がアーカイブズによって評価選別される仕組みを整えている。これは法人が文書の作成から保存、廃棄までを適切にコントロールすることで、機関アーカイブズとして資料の保存をするとともに部署等の恣意的な廃棄等を防ぐものである。なお、愛知医科大学アーカイブズ規程第1条は、設置を定めた条項で、「愛知医科大学に、学校法人愛知医科大学および本学の歴史に係る各種の資料の収集、整理、保存、活用、調査・研究等を行うため、アーカイブズを置く。」としている。その他、組織体制、業務内容、事務、運営委員会のことを定めているが、アーカイブズ規程では、評価選別に関する条項はない。

14) インデントを下げることで規程等の関係性を示しており、インデントが下がっているものは上段の規程に基づく下部規程等である。

評価選別について具体的な業務について記載があるのは、大学アーカイブズで定めている「文書の評価選別に係るマニュアル」である。ここでは、愛知医科大学・病院の歴史に係る文書、愛知医科大学・病院にとって事務文書として重要であると判断できる文書、天災等の影響により残存が少ない時期の文書、過去の利用記録等から利用頻度が高いと推測できる文書を保存するとしている。

例えば、保存期間が10年であった文書は保存するといった判断やよく利用されるアーカイブズ資料と類似した文書は保存するといった判断を行っている。

（３）評価選別における実務上の課題

評価選別において、実務を進めているなかで挙がっている課題は４つある。

① 評価選別の判断に関する課題

「文書の評価選別に係るマニュアル」は、実務上、機械的に処理することが可能である一方、保存期間が１年であった文書は重要でないという判断につながる可能性もある。そのため、評価選別では現物を確認することが重要と考え、業務を進めている。

② 評価選別の対象に関する課題

文書の廃棄にあたって、保存期間が満了した文書は、アーカイブズ室長の評価選別を受けなければならないということはすでに述べた通りだが、すべての文書が評価選別されるわけではない。

文書保存規程では、保存期間が１年未満の文書については、文書目録に記録する必要がないと定めており、文書目録そのものに記録がされないため評価選別の対象から外れてしまう。また、この文書保存規程も2015（平成27）年に新規制定された際、2014年（平成26年）度以前の文書については、各部署の保管責任者の判断により、必要に応じて規程にならうよう努めることを明示しているため、保管責任者の判断によっては評価選別を受けずに廃棄される可能性もある。ただ、文書の廃棄に関することはアーカイブズが関わっているという認識が保管責任者に浸透しつつあり、廃棄の際には先に連絡がくることも増えてきている。

③ 文書保存の煩雑さ

文書保存規程では、部署ごとの保管責任者に対して、文書目録、標準ファイル区分表、年度ごとの文書ファイル管理簿、廃棄文書目録の作成を義務付けている。

文書目録では、文書単位で起案日、決裁日、文書件名等が記録される。標準ファイル区分表では、業務の性質、内容に応じたファイル区分を設定し、保存期間を定める。年度ごとの文書ファイル管理簿では、標準ファイル区分表にならい、年度ごとに文書がまとめられたファイルを記録する。なお、保存期間が満了し、移管もしくは廃棄したこともここに記録する。最後に、廃棄文書目録では、廃棄された文書が記録される。

以上の目録等は、それぞれ重複した情報の記載が目立つ。そのため部署にとって業務上、利用価値が高い文書はまだしも、利用価値が低そうな文書を大量に記録することは難しい。法人にとっても効率的に業務の遂行を行うことが求められているなか、レコード・マネジメント（現

用や半現用の文書管理）によって現場が疲弊し非効率になるようでは困るだろう。文書保存規程の改正も含めて、現場が許容できるよう検討する必要がある。

④ 永年保存に関する課題

愛知医科大学では、文書保存規程で、保存期間を定めている。2015（平成27）年以降、移管されている部署は、3部署のみであり、十分に移管が進んでいるとは言えず、各部署では多くの文書が永年保存の判断をしている傾向にある（もしくは移管に消極的）と推察される。

4. 収集アーカイブズの事例

ここまで機関アーカイブズの事例として愛知医科大学アーカイブズをみてきた。すでに私立医科大学のアーカイブズが小規模であることはアンケート調査から推察できた。今後、大学アーカイブズが学内外に活動の成果を示し、予算・人員等を増やしていくためには、所蔵点数を増やすことが、親機関等にアピールしやすいだろう。そこで、所蔵点数をどのように増やすか、という点に焦点をあてつつ、収集アーカイブズの側面から、もう一度愛知医科大学アーカイブズの事例を紹介した後、聖路加国際大学、金沢医科大学の事例をみていきたい。

（1）愛知医科大学アーカイブズの事例

愛知医科大学アーカイブズは、2009（平成21）年より広報活動の一環として『アーカイブズ・チップス』を刊行しており、2018（平成30）年3月31日発行した最新号で第44号となる。

『アーカイブズ・チップス』は、アーカイブズに関する様々な情報をA4サイズ、1枚分にコンパクトに解説したもので、「愛知医科大学アーカイブズ」「愛知医科大学学報」「病院移転とアーカイブズ」といった愛知医科大学に関わるアーカイブズの情報だけでなく「国際アーカイブズの日」「公文書等の管理に関する法律」「機関アーカイブと収集アーカイブ」等も発信している。刊行時には学内に通知を行っているが、大学ホームページでも公開しており、学外からもアクセスが可能である。

また、アーカイブズへの学内刊行物納入に関する要項について、毎年各部署宛てに送付するだけでなく部署の責任者に対しても個別に連絡を行っている。

さらに年度末には、学内の教職員の退職者を対象に愛知医科大学に関わる資料の寄贈依頼をしており、教員にあたっては自室を整理する際に出た資料の寄贈が多い。

（2）聖路加国際大学の事例

聖路加国際大学は、1920（大正9）年、キリスト教宣教師ルドルフ・B・トイスラーが創立した聖路加国際病院附属高等看護婦学校を母体とする。日本初の看護学部4年制教育、大学院博士後期課程を設置する等、日本の看護教育史においても特筆すべき大学である¹⁵⁾。

15) 聖路加国際大学「歴史と沿革」(<http://university.luke.ac.jp/about/vision/history.html> 最終閲覧日2018-11-12)。なお、ルドルフ・B・トイスラーは、聖路加国際病院附属高等看護婦学校に先立ち1902（明治35）年に聖路加国際病院を設立している。

医学部を設置していないため私立医科大学ではないが、全国大学史資料協議会に加盟しており、積極的な発信が行われているため、私立医科大学における大学アーカイブズの類似例としてとして取り上げたい。

聖路加国際大学は、病院と大学がもともと別の法人であったため、アーカイブズ関連施設もそれぞれ存在していた。病院では2010（平成22）年に経営企画室に文書管理室が設置され、倉庫に保管されていた大量の資料について、整理・保管・展示室の整備が行われた。この「聖路加アーカイブズ」は先駆的な「病院アーカイブズ」として知られている¹⁶⁾。

また、大学では2005（平成17）年に85周年記念事業において準備委員会が設置され、2008（平成20）年に常設の大学史編纂・資料委員会が設置、さらに図書館内に資料室を設置している。なお、これらのアーカイブズは法人一体化にともない統合され、現在の大学史編纂・資料室となっている。

聖路加国際大学の特徴として、卒業生等の記録収集に積極的である点が挙げられる。

新沼によるオーラル・ヒストリーに関する研究がなされているが、オーラル・ヒストリーが教育に関する重要な資料として位置づけられており定期的な収集が行われている¹⁷⁾。また、同窓会の会報や総会において資料提供を呼び掛けるといった取り組みが行われている。

展示や公開にも積極的である。『聖路加看護大学のあゆみ』と題するブックレットを4冊発行しており、入学者に配布される。手に取りやすいサイズだけでなく、Q&Aでまとめている等、読者への配慮が多くみられる。

常設展示では、トイスラー記念館、聖路加メディロカス、大学歴史展示室の3か所で行われ、病院西口ヒストリーボードでは年表を掲示している。さらに「聖路加アーカイブズ写真館」として写真のデジタルデータをイントラネット上で公開するといったこともされている。

学内広報への寄稿については、学生、保護者、患者、受験生、同窓生、職員といった対象別の各誌に活動報告やコラムを寄稿しており、多くの関係者に発信している。

なお、事務文書についても「聖路加国際大学文書管理規定」に基づき、保存期間満了文書について資料室より移管を依頼することができる。

（3）金沢医科大学の事例

次に取り上げる大学は金沢医科大学である。

金沢医科大学は、1972（昭和47）年に日本海側で唯一の私立医科大学として開学しており、愛知医科大学と同様に1970年代に創立した私立医科大学のひとつである。『金沢医科大学四十年史』によると、2008（平成20）年に資料編纂室が出版課の一部業務を引き継ぐ形で出版局内に設置されている¹⁸⁾。現在の主な業務として、金沢医科大学報、出版局が企画する出版物および大学の通史・記念誌の編纂、学内で発行される逐次刊行物の保管、大学に著作権のある画像データ・写真・図等の整理保管を挙げている。なお、2013（平成25）年4月より出版メディア業務部出版メディア業務課内に資料編纂担当を設置するようになり、2016（平成28）年4月からは

16) 藤本前掲論文。

17) 新沼前掲論文。

18) 金沢医科大学四十年史編纂委員会編『金沢医科大学四十年史』金沢医科大学出版局、2012。

広報部出版メディア課内に設置されている。

アンケート調査についてはすでに述べた通りであるが、金沢医科大学は所蔵点数が他大学よりも多い特徴がみえた。そこで、目録内容の内訳について追加調査を行ったところ、全体の所蔵点数31573点のうち、大学に関する写真資料が15475点（49%）、卒業生、大学関係者に関する資料（新聞記事）が15189点（48%）と多いことがわかった。理由として「大学の公式な行事・概要等を学内外に効果的に伝える貴重な資料」であることを挙げていた。

金沢医科大学と愛知医科大学を比較すると、同時期に開学しているだけでなく、金沢医科大学資料編纂室が設置された年に愛知医科大学文書室を設置しており類似点がある。しかし所蔵点数は3倍も異なっていた。

その要因として考えられる金沢医科大学の大きな特徴は、資料編纂担当が広報部のなかに設置されている点である。各部署より、印刷物調達や写真撮影依頼を受けると外部業者に発注し、撮影を行う等する。作成された印刷物、写真は出版メディア課で検収が行われ、資料編纂担当で収集が行われる。収集される資料は、現品、高品位PDF、掲載写真の3点である。検収終了後は、依頼部署へ納品を行い、アーカイブズシステムへの登録が行われる。

「各種刊行物、写真点数などの登録は、基本的に毎年予定されている行事が施行された場合に更新を行っている」とのことで、通常業務内で所蔵点数が増加する仕組みを有している点は特筆すべきだろう。このように、作成を管轄する部署と保存部署が密接であることは、資料が保存されやすいことを示していると言えるだろう。

5. 考察

これまでに私立医科大学における大学アーカイブズについて事例をみてきた。ここでは、以上の事例を踏まえて「機関アーカイブズ」と「収集アーカイブズ」の側面から、それぞれ考察を試みたい。

（1）機関アーカイブズにおける課題

まず、機関アーカイブズについて、自動的に文書が流入するために重要なことは学内規程を定めることであろう。ただし、学内規程を定めたからといって、すぐさま規程通りに運用が進むわけではない。愛知医科大学アーカイブズの評価選別における課題について、4つ挙げたが、それらは大きく2つにわけることができるだろう。

ひとつは大学アーカイブズ側の課題である。愛知医科大学アーカイブズの事例において挙げた「評価選別の判断に関する課題」が、これにあてはまるだろう。

大学アーカイブズでは、法人文書が移管された際、大学アーカイブズによって評価選別を行わなければならない。愛知医科大学アーカイブズは、規程、内規を定めて自動的に法人文書を受け入れる体制は整えており、内規やマニュアル等を基準にしながら評価選別を行っている。その基準のひとつには「愛知医科大学・病院にとって事務文書として重要であると判断できる文書」があり、長期保存されてきた文書と解している。

しかし、平井孝典が「資料の保存期間は、業務の都合で定められたものであるから、長期保存文書の方が重要である、あるいは残すべきものが多いとは必ずしも言えない」¹⁹⁾と指摘し

ているように、長期保存されていたというだけで判断するのは不十分であろう。重要でない長期保存されてきた文書が、大学アーカイブズで保存されるだけなのであれば、資料が廃棄されるという最悪の事態は避けられるだろうが、むしろ、そのような考えに基づいて「長期保存でない文書は重要ではない」と解して廃棄するほうが問題であろう。

このように、愛知医科大学アーカイブズは、いずれ重要になるだろう文書の価値を、現時点で予測するという評価選別の判断の難しさに直面している。

アーカイブズ学における評価選別論では、石原一則によると、評価選別は価値という基準によって判断されるという立場と、意思決定のプロセスの証拠という基準によって判断されるという立場がある²⁰⁾。これらの立場に照らすと愛知医科大学アーカイブズは前者ということになるはずだが、基準とする価値について、石原は「その価値の概念と解釈が特定のイデオロギーやドグマに陥らずに、いかに説得的な方法を取り得るかという問題に向かわねばならない」と述べている²¹⁾。大学アーカイブズが、大学内外に対して「説得的」であるとともに、大学内の特定の個人や集団に由来した偏りのある判断を避けることが重要であろう。

すでに愛知医科大学アーカイブズでは、評価選別をした記録は、その理由も含めて、すべて保存されている。しかし、加えて評価選別は、学内の運営委員会や第三者委員会等によって定期的に審議されることが重要であろう。また、評価選別がその他の部署等によって左右されないように、組織として大学アーカイブズが独立的であることも重要であろう。

さて、もうひとつは文書を流入させる側の課題である。愛知医科大学アーカイブズの事例において挙げた「評価選別の対象に関する課題」、「文書保存の煩雑さ」、「永年保存に関する課題」が、これにあてはまるだろう。

これらは、自動的に流入できるシステムが動き始めるまでの課題かもしれないが、部署によっては「こんなものまで」と言われることも多く、各部署との認識のずれを感じることがある。これらの認識のずれは、「文書に対する認識のずれ」にあるように思われる。

文書に対する認識のずれは、文書保存規程が制定される以前、文書が各部署の責任者の判断で廃棄できたことが一因と考えられる。加えて、文書保存の煩雑さが、文書保存の業務が滞ることや、文書の多くを永年保存とする判断につながっている可能性が高い。各部署にとっては、業務が増加することから、アーカイブズ資料としての重要性は認識されにくいだろう。

これらの課題に対して、まずは、大学アーカイブズの役割を各部署に周知していく必要があるだろう。各部署に出向いて現物を見る、現況等を聞くといった各部署とのやりとりが資料の移管につながっているように筆者は考えている。加えて、愛知医科大学アーカイブズでは、どのような場合でも文書を廃棄する際は必ず大学アーカイブズに連絡してほしい旨を伝えてきた。最も避けなければならないのは大学アーカイブズが評価選別を行うことなく各部署によっ

19) 平井孝典『公文書管理と情報アクセス 国立大学法人小樽商科大学の「緑丘アーカイブズ」』世界思想社、2013、p138。

20) 石原一則「評価選別論の歩みと現在」国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』下、柏書房、2003、p105-118。なお、評価選別における意思決定の証拠という基準について、石原は「記録が派生するプロセスや、アイテムやファイルといった記録の構成要素と組織体の機能との相互関係、すなわちコンテキストの証拠の保存を目標に行われるべしという主張」と述べている。

21) 石原前掲論文。

て廃棄されることである。各部署において、「文書の廃棄」と「大学アーカイブズ」が連想されることによって、廃棄を未然に防いでいく工夫が必要だろう。

また文書保存の煩雑さを軽減していくためには、大学アーカイブズは、非現用文書を主に扱う機関ではあるが、大学アーカイブズが各部署に対して保存方法や保存期間等といったレコード・マネジメントに関する助言も行えるようにすべきだろう。

（2）収集アーカイブズにおける課題

次に、収集アーカイブズについての考察に移る。森本は「+a」という位置づけで収集アーカイブズをみており、この「+a」によって大学の独自性を発揮できるという²²⁾。菅は、これについて、組織・予算・人員等に規定されたトータルアーカイブズとしての戦略によるものと述べている²³⁾。私立医科大学の現状を踏まえると、まず、資料を収集することによって所蔵点数を増やしていくことが課題と言えよう。

これまでの事例を踏まえると、まず聖路加国際大学の事例のように積極的な収集、展示、出版が考えられる。これらは多くの大学で行われていることではあるが、聖路加国際大学の特筆する点は学生に対する広報であろう。

米国のPublic Relations Society of America (PRSA) の定義では“Public relations is a strategic communication process that builds mutually beneficial relationships between organizations and their publics.”とあるように、広報は有益な関係性を築く戦略的なコミュニケーションプロセスである²⁴⁾。『聖路加看護大学のあゆみ』の編集後記で、当時の聖路加看護大学大学史編纂・資料室室長の渡部尚子は、その内容について「本学教職員から『聖路加看護大学について学生へ伝えたいもの』として提案された様々な意見をカテゴリー化し、最も多く提案のあった内容から選んだもの」と述べている²⁵⁾。ブックレットは、章ごとに短くわかりやすくまとまっており、入学生に対して配布されている。そのため入学生は、大学創立者、活躍された看護師から現在の大学、在籍する教員に至る軌跡を平易に知ることができる。

新沼は、聖路加国際大学におけるオーラル・ヒストリーの収集のなかで「大学活動の主体は学生」と述べ教育活動の収集の重要性を述べているが²⁶⁾、収集するためには卒業生の協力が不可欠であろう。そして、いずれ卒業生になる学生に伝え、価値を認識してもらうことが、次の卒業生の協力につながる。このように、大学アーカイブズで収集していくためには、卒業生とのよい関係を築くことを前提に広報を行い、サイクルを回していく必要があるだろう。

次に、所蔵点数を増やしていくことで重要な観点は、森本や菅が指摘しているように、資料に応じた、博物館や図書館等の、資料を扱う機関にわけてもよいことである²⁷⁾。小規模に運営

22) 森本前掲論文。

23) 菅前掲論文。

24) Public Relations Society of America, *About Public Relations* (<https://www.prsa.org/all-about-pr/> 最終閲覧日2018-11-9)。

25) 渡部尚子「編集後記」聖路加看護大学大学史編纂・資料室編『聖路加看護大学のあゆみ』聖路加看護大学、2010、p110。

26) 新沼前掲論文。

27) 森本前掲論文、菅前掲論文。

が行われていると推測される私立医科大学において、大学アーカイブズに予算・人員等が潤沢に用意されるケースは少ないだろう。したがって、資料を収集、保存していくためには役割分担を行っていくほうがむしろ効果的なはずである。すでにアーカイブズと図書館や博物館といった機関との連携の実例はあり、岩手医科大学では、歴史資料（史料）に関する事務は企画調整課が行なっており、記念誌、歴史資料（史料）の一部の保存・管理は図書館が行っている²⁸⁾。愛知医科大学アーカイブズでは、一部非公開や利用制限があるが図書館システムによる大学アーカイブズ資料の公開を行っている。

ここでは、さらに広報部門等の情報発信、資料作成元の部署も巻き込むことを考えたい。金沢医科大学の事例では、出版、写真等に関して広報部が集中的に担っており、そのなかに資料編集担当も設置され保存が行われていた。資料収集の観点から考えて、まず押さえるべき部署のひとつは情報発信や学内刊行物等の作成に関わる部署といえる。

ここで収集アーカイブズにおいて注目すべき点は「アーカイブズ資料の情報が自動的に収集されるシステムをもつこと」であろう。

前述した愛知医科大学アーカイブズにおける学内刊行物納入の制度もアーカイブズ資料が自動的に収集されるシステムのひとつではあるが、各部署が作成した印刷物等を納品する制度であるため、大学アーカイブズとしては納品されるまで、その部署の作成を把握できない。

その一方で、金沢医科大学では印刷物などの作成元を掌握しており学内刊行物が収集されないという事態が起きえない。収集アーカイブズにとって重要な情報は「どの部署でどのような資料が存在するか」である。その情報が作成と同時に大学アーカイブズに共有される仕組みは収集において非常に重要であるだろう。そして、それと同時に現物が収集できるのであれば理想的と言えよう。

最後に、大学アーカイブズを担う人材についても課題がある。愛知医科大学では司書が担当し、東京女子医科大学では学芸員が担当しているというように²⁹⁾、各専門職員の人事交流も大学アーカイブズには必要だろう。ただアーキビスト不在による代替として司書や学芸員をあてがうような消極的な理由からではない。司書や学芸員と同じように専門領域を有するアーキビストが、司書と学芸員と関わることによって収集、公開に多様性を生み出すという積極的な理由から、各専門職員の人事交流が大学独自の「+α」に活かすことができるだろう。

おわりにかえて：大学アーカイブズと医療アーカイブズ

私立医科大学における事例を挙げ、大学アーカイブズの確立に向けて考察を試みてきた。ところで、これまで検討していないが医科大学に関しては「診療」という点も関わるはずである。菅は、大学アーカイブズについて「管理運営」だけでなく「教育研究」も重要である、との見解を述べていた³⁰⁾。筆者としては医学教育、医学研究に不可欠な「診療」も医科大学における

28) 本アンケート調査結果。

29) 本アンケート調査結果および全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイブズ』京都大学学術出版会、2005。

30) 菅前掲論文。

大学アーカイブズで移管されるべき対象であると考えている。

医療アーカイブズについて少し触れておくと、廣川和花は医療アーカイブズについて「医学・医療・疾病に関する公文書や病院の運営に関わる記録、医療記録、患者自身による記録など多様なものが含まれる」と述べており³¹⁾、医科大学における大学アーカイブズの多くを包含するものであろう。

愛知医科大学病院では、カルテ等の保存期限は訴訟に関わる重要な記録、もしくは研究において重要な記録については永年保存されているが、その他は最長で10年、最短で5年で廃棄している。愛知医科大学アーカイブズの今後の展望としては、このカルテ等を機関アーカイブズとして受け入れる体制を整えることであるが、実際に受け入れるためには課題が山積みである。

まず、カルテという、多くが生存している個人の個人情報に適切に扱う必要がある。それを長期的に保存する場所を確保すると同時に評価選別についても考えなければならない。現在、愛知医科大学アーカイブズでは、量的にも質的にもカルテ等を受け入れる力を有していないが、廣川が大阪皮膚病研究会関係文書を事例に取り上げているように³²⁾、カルテ等の歴史的重要性は高いだろう。すでに神奈川県立公文書館では、カルテの評価選別を行っているといった事例もある³³⁾。いずれ大学アーカイブズで保存できるように進めていきたい。

さて、以上のように、私立医科大学において大学アーカイブズを確立するために、機関アーカイブズ、収集アーカイブズにおいて、それぞれ2点ずつ課題を挙げた。そして今後の展望として、カルテ等の保存についても触れた。

機関アーカイブズにおける課題は、大学アーカイブズ側の課題と文書を流入させる側の課題である。大学アーカイブズ側の課題は、大学アーカイブズが法人文書の評価選別を行う際の課題であった。そこで大学アーカイブズは、大学内外に対して「説得的」であるとともに、大学内の特定の個人や集団に由来した偏りのある判断を避けることが重要であることを述べた。

もうひとつの課題は、文書を流入させる側の課題であった。それは各部署による大学アーカイブズへの移管がうまくいかず廃棄されるという課題であり、大学アーカイブズは、各部署に出向いて現物をみる、現況等を聞くといった各部署とのやりとりが重要であることを述べた。

次に、収集アーカイブズにおける課題は、大学アーカイブズがいかに所蔵点数を増やすか、ということであった。そこで愛知医科大学アーカイブズの事例に加え、2校の事例を挙げた。聖路加国際大学は、大学アーカイブズにおける学生への広報について、また、金沢医科大学は所蔵点数の多さを裏付ける出版物、写真等の自動的収集について特筆するものがあつた。図書館、博物館に加えて、その他の部署との連携をもちつつ、大学独自の資料収集が重要であることを述べた。

加えて、大学資料の収集と関連して大学アーカイブズを担う人材を課題として挙げた。図書

31) 廣川和花「日本における医療アーカイブズの現状と課題—ハンセン病資料を念頭に置いて—」『日本ハンセン病学会雑誌』86巻2号、2017、p135-139。

32) 廣川和花編著『大阪大学アーカイブズ所蔵 大阪皮膚病研究会関係文書目録』日本学術振興会科学研究費補助金・若手研究 (B)、研究成果報告書 (2010年度～2012年度、課題番号: 22700841)、2013。

33) 石原一則「神奈川県立公文書館における文書の評価と選別」『名古屋大学史紀要』12号、2004、p1-32。

館、博物館といった機関と連携し、大学独自の資料を収集していくためには、司書や学芸員といった各専門職員の人事交流も大学アーカイブズには必要であることを述べた。

最後に、今後の展望として医科大学においてはカルテ等も大学アーカイブズの収集対象になりえることも触れた。

私立医科大学における大学アーカイブズは発展途上ではあるが、今後も大学アーカイブズにおいて継続的に活動していくことで大学アーカイブズの発展に貢献できれば幸いである。

謝 辞

本稿は、2018（平成30）年度アーカイブズ・カレッジ（長期履修コース）修了論文「私立医科大学アーカイブズの現状と課題 ―愛知医科大学アーカイブズの事例を中心に―」を改稿したものである。作成にあたっては、聖路加国際大学、金沢医科大学、東京女子医科大学をはじめとする各大学に、アンケート、取材に応じていただいた。また、作成にあたって国文学研究資料館准教授の青木睦氏にご指導いただいた。さらに愛知医科大学学務監で、愛知学院大学准教授の山口拓史氏からは多くの示唆をいただき、愛知医科大学アーカイブズ副室長の後藤佳志氏と総合学術情報センター主査の小林晴子氏には意見や文献調査等の支援をいただいた。この場を借りて心より御礼を申し上げたい。

**Present Situation and Issues of Private Medical University Archives:
A Case Study of the Aichi Medical University Archives**

FUKUTAKE Tooru

In this paper, to understand the present situation and issues of private medical universities from a practical standpoint by focusing on the case of Aichi Medical University, we conducted a questionnaire survey and interviews and compared the results with those from other universities. Private medical university archives face several issues in terms of serving as institutional archives and collecting archives. As institutional archives, few university archives are involved in the disposal and transfer of corporate documents. As university archives, however, the evaluation and selection of corporate documents is an issue. It is important to avoid biased judgments originating from specific individuals or groups within the university and to be persuasive both on and off campus. An issue regarding the intake of documents is that documents from each department are not always successfully transferred to the university archives and are instead discarded. It is important for university archives to communicate with each department through actions such as visiting each department to observe the actual situation and listening to comments regarding the current situation. Next, in terms of collecting archives, the number of holdings is relatively small. Examples of how to collect materials will be introduced from Aichi Medical University Archives, St. Luke's International University, and Kanazawa Medical University. St. Luke's International University makes it possible to collect materials through effective public relations with students. Kanazawa Medical University automatically collected publications and photographs for the purpose of collecting materials. As a future prospect, private medical universities have mentioned the collection of medical records in university archives.